資　料　6

宇治市歴史的風致整理表

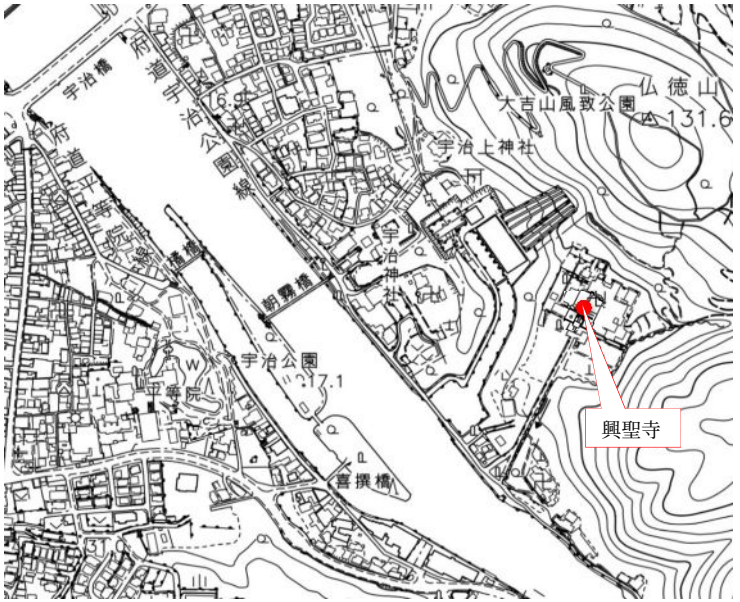
1．遊覧と参詣　宇治川河畔の歴史的風致

（1）宇治川河畔の参詣

建　造　物	活　動　内　容	市街地環境（建造物と活動の関係性・一体性）
○平等院（びょうどういん） 平等院鳳凰堂（国宝・世界遺産） 【建築年代】 鳳凰堂：平安時代後期（天喜元年1053） 扇芝：江戸時代 【50年根拠資料】 平等院：『扶桑略記』永承7年（1052）・国宝 扇芝：『宇治名所絵図』 【造り・特徴】 中堂、両翼廊、尾廊で構成される 中堂：一重裳階付入母屋造、本瓦葺 翼廊:一重二階、切妻造、隅楼二重三階、 宝形造、本瓦葺 尾廊：一重、切妻造、本瓦葺	**○宇治十帖の古跡と宇治めぐり** 【50年根拠となる文献＋作成年代＋記述】 平等院並びに扇芝は『宇治名所古跡之絵図』（江戸後期）など様々な宇治名所図に描かれる。 【現在の活動内容】 昭和29年（1957）に平等院鳳凰堂が10円硬貨のデザインになったことにより、平等院の存在が周知され、平成の大修理以降（平成24～26年）急速に増加した参詣者を受け入れている。 【活動のイメージがわかる写真】 扇芝	 平等院鳳凰堂と宇治川

1．遊覧と参詣　宇治川河畔の歴史的風致

（1）宇治川河畔の参詣

建　造　物	活　動　内　容	市街地環境（建造物と活動の関係性・一体性）
○興聖寺（こうしょうじ） 興聖寺山門 【建築年代】 江戸時代 【50年根拠資料】 『宇治名所古跡之絵図』（江戸後期） 『宇治興聖寺文書』 宇治市指定有形文化財　12棟 【造り・特徴】 「琴坂」と称する宇治川畔石門から山門までの参道を持つ。 本堂：入母屋造、本瓦葺 僧堂：入母屋造、本瓦葺、庇部分桟瓦葺 庫裏：切妻造、本瓦葺、東面のみ桟瓦葺	**○宇治十帖の古跡と宇治めぐり** 【50年根拠となる文献＋作成年代＋記述】 『東遊草』(宝永元年(1704))、『京師巡見記』(明和5年(1768))『西遊日記』(寛政5年(1793))などの紀行に興聖寺参拝の記事がある。 【現在の活動内容】 興聖寺の参道は「琴坂」と称し、桜と紅葉の名所として人気を博している。「春岸の山吹」「興聖の晩鐘」は宇治十二景に含まれている。 【活動のイメージがわかる写真】 宇治の紅葉（興聖寺の琴坂：府指定名勝）	

1．遊覧と参詣　宇治川河畔の歴史的風致

（1）宇治川河畔の参詣

建　造　物	活　動　内　容	市街地環境（建造物と活動の関係性・一体性）
○三室戸寺（みむろとじ） 三室戸寺本堂 【建築年代】 本堂：文化11年（1814)棟札 三重塔：元禄17年(1704)棟札 【50年根拠資料】 『都名所図会』安永９年(1780) 西国三十三所観音霊場巡礼の十番札所 本堂：棟札 三重塔：棟札 【造り・特徴】 本堂：単層裳階付仏堂、屋根二重、桟瓦葺、入母屋造、軒唐破風付、軒唐破風銅板葺 三重塔：三間三重塔婆、本瓦葺	**○宇治十帖の古跡と宇治めぐり** 【50年根拠となる文献＋作成年代＋記述】 正行尊の『巡礼手中記』(平安時代末期)巡礼が三室戸寺で終わりと記載 『伊紀農松原』（文化6年（1809））「申の刻に立出て三室戸巡礼札所へ詣て、観世音を拝礼し、此村に茶屋も有、相応の宿屋もあれと、」 『日記（本居宣長）』（延享5年（1748））「廿五日、伏見京橋ニ著畔ス、宇治平等院、興聖寺、恵心院、離宮、三室戸、本尊開帳、黄檗山、再入京」 【現在の活動内容】 西国三十三所が行われたころから変わらず、巡礼地として巡礼者や参詣者を迎える。 日本遺産「1300年つづく日本の終活の旅～西国三十三所観音巡礼～」の一つとして認定される。 【活動のイメージがわかる写真】 参詣客で賑わう三室戸寺	

1．遊覧と参詣　宇治川河畔の歴史的風致

（2）宇治川河畔の遊覧

建　造　物	活　動　内　容	市街地環境（建造物と活動の関係性・一体性）

○宇治十帖の古跡

宇治十帖の古跡（かげろう石）

宇治十帖の古跡を示す石碑（夢浮橋）

【建築年代】

かげろう石：平安時代に建立(石仏)

宇治町建立石碑：昭和の初め

【50年根拠資料】

宇治市文化財愛護協会『源氏物語宇治十帖の風土』

宇治市指定有形文化財（かげろう石）

【造り・特徴】

宇治町建立：幅15cm奥行15cm高さ99cm程度・県神社の宮司奥村源二郎氏の揮毫

○宇治十帖の古跡と宇治めぐり

【50年根拠となる文献＋作成年代＋記述】

『菟芸泥赴』(貞享１年(1684))の記載が初見。古跡が虚構と記載される。しかし、名所案内図（江戸）の記載あり。

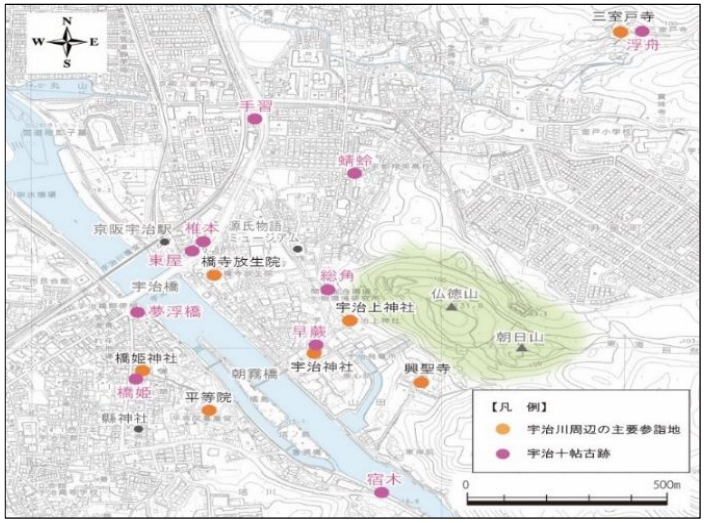
【現在の活動内容】

宇治十帖の古跡にちなんだ石碑を昭和の初めに宇治町が建てて以降、地元の有力者などが平成7年まで石碑を建ててきた。宇治十帖の古跡を中心に宇治の寺社を巡る宇治十帖スタンプラリーが行われる。

【活動のイメージがわかる写真】

宇治十帖スタンプラリー

宇治十帖	古跡の位置
（一）橋　姫（はしひめ）	橋姫神社境内
（二）椎　本（しいがもと）	彼方神社境内
（三）総　角（あげまき）	宇治上神社北方(石碑)
（四）早　蕨（さわらび）	宇治神社境内西北隅(石碑)
（五）宿　木（やどりぎ）	平等院東南、宇治川畔槇尾山麓(石碑)
（六）東　屋（あずまや）	東屋観音（市指定文化財）
（七）浮　舟（うきふね）	三室戸寺境内
（八）蜻　蛉（かげろう）	かげろう石（市指定文化財）
（九）手　習（てならい）	府道京都宇治線西側(石碑)
（十）夢浮橋（ゆめのうきはし）	宇治橋西詰(石碑)



宇治十帖の古跡位置図

物語である『源氏物語』宇治十帖ゆかりの地として、宇治の地にある石造仏や社に宇治十帖の巻名を付け、親しまれている。

1．遊覧と参詣　宇治川河畔の歴史的風致

（3）宇治川河畔の遊覧

建　造　物	活　動　内　容	市街地環境（建造物と活動の関係性・一体性）
○旧菊屋萬碧楼（きゅうきくや　まんぺきろう） 現在は喫茶店として利用される旧菊屋万碧楼 【建築年代】 主屋：大正4年（1915）以前 【50年根拠資料】 『京都府久世郡写真帖』大正4年 【造り・特徴】 主屋：木造2階建て桟瓦葺、入母屋造	**○宇治川の川遊び** 【50年根拠となる文献＋作成年代＋記述】 『宇治川両岸一覧』(文久３年(1863))や『都名所図会』(安永９年(1780))に参拝者や宴会客で賑わう宇治川河畔の様子が描かれる。 【現在の活動内容】 宇治川遊覧を象徴する建物として川沿いの旧菊屋万碧楼や通園茶屋を今も船上から眺めることができる。宇治川の船遊覧は、主に春から夏にかけて行われており、在りし日の宇治川景観を想起させる。 【活動のイメージがわかる写真】 宇治川と通圓茶屋と旧菊屋萬碧楼	
○通圓茶屋（つうえん　ちゃや） 通圓茶屋『宇治川両岸一覧』 【建築年代】 寛文12年(1672) 【50年根拠資料】 『宇治川両岸一覧』文久３年(1863) 『通円家住宅調査報告』・『通円家宅御造作』 【造り・特徴】 木造２階建て瓦葺、切妻造		

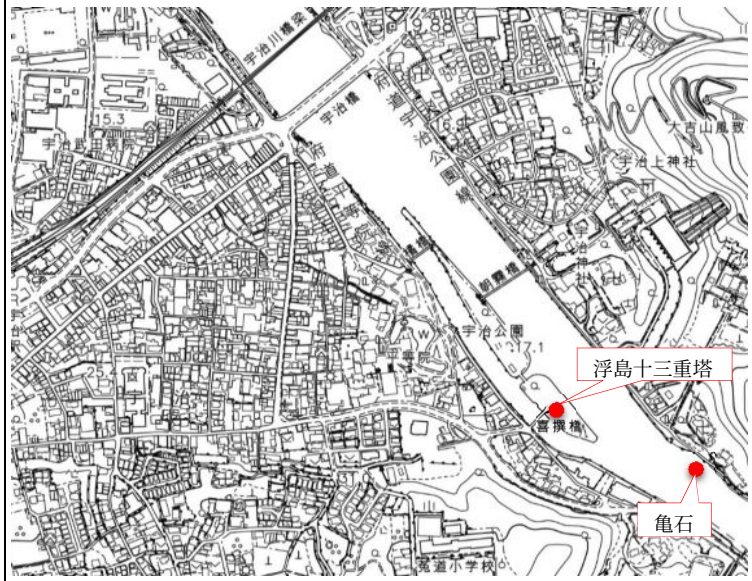
1．遊覧と参詣　宇治川河畔の歴史的風致

（3）宇治川河畔の遊覧

建　造　物	活　動　内　容	市街地環境（建造物と活動の関係性・一体性）
〇宇治橋（うじばし） 現在の宇治橋（平成8年架け替え） 【建築年代】 最初の架橋：大化２年(646)(『宇治橋断碑』)・天武８年(679)までの十数年間(『日本書紀』) 現在の宇治橋：平成８年(1996) 【50年根拠資料】 『宇治川両岸一覧』文久３年(1863) 【造り・特徴】 擬宝珠と三の間(後述)を持つことが特徴 現在の宇治橋：規模は全長155.4m、幅員26.5m・橋脚数６本・躯体の大部分がコンクリート製・木製の欄干と桁隠しを持つ	**〇宇治川河畔の遊覧** 【50年根拠となる文献＋作成年代＋記述】 ・遊覧と参詣 【現在の活動内容】 宇治を表す景観として、宇治橋は愛されまた、生活の一部となる。 大幣神事や宇治茶祭りなどの祭礼の場となる。 【活動のイメージがわかる写真】 	

1．遊覧と参詣　宇治川河畔の歴史的風致

（3）宇治川河畔の遊覧

建　造　物	活　動　内　容	市街地環境（建造物と活動の関係性・一体性）
○浮島十三重塔（うきしまじゅうさんじゅうのとう） 浮島十三重塔 【建築年代】 創建：弘安9年（1286） 再興：明治41年(1908)8月21日 【50年根拠資料】 『帝王編年記』・『宇治名所図』 重要文化財 【造り・特徴】 石造十三重の塔・高さ約15m30㎝ 古石塔の中では日本一の高さ	**○宇治川の川遊び** 【50年根拠となる文献＋作成年代＋記述】 『雲錦随筆』渇水期には宇治川の奇石を見ようと「京摂の騒人墨客」が引きも切らない様子であったと記載 【現在の活動内容】 平安時代から変わらない山紫水明の宇治川の自然美を愛で、『源氏物語』などにゆかりのある古跡等の名所散策や遊覧ができ、船で遊ぶ人々の風景を今も見ることができる。 【活動のイメージがわかる写真】 浮島十三重塔と遊覧	
○亀石（かめいし） 亀　石 【建築年代】 【50年根拠資料】 『宇治川両岸一覧』(文久３年(1863)) 『宇治名勝御案内付宇治川ライン』(昭和５年(1930)) 【造り・特徴】 自然石が亀の形をしている		

2－1．茶どころ宇治の歴史的風致

（1）宇治のお茶づくり

建　造　物	活　動　内　容	市街地環境（建造物と活動の関係性・一体性）

○覆下茶園（おおいしたちゃえん）

本簀の様子

覆下茶園と茶摘み（大正期）

【建築年代】

安土桃山時代

【50年根拠資料】

『日本教会史』(安土桃山時代)

【造り・特徴】

４月頃に覆いがされる

本簀：丸太杭と竹で棚を作り、その上にヨシズを広げてワラを敷くもの

○宇治のお茶づくり

【50年根拠となる文献＋作成年代＋記述】

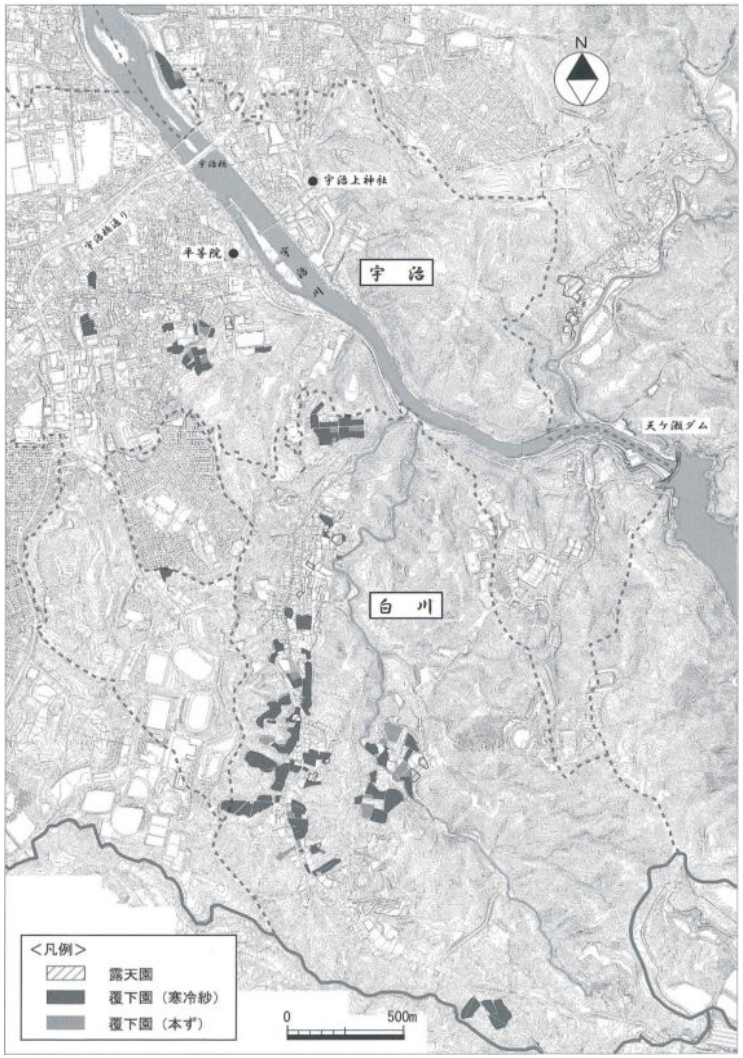
『言経卿記』天正19年（1591）には豊臣秀吉も宇治へ茶摘み見物に出かけている。当時宇治の茶摘み見物が一種の流行であった。

【現在の活動内容】

覆下茶園は宇治茶の原点といえるもので、品質向上を主目的として覆下栽培が改良されつつ継承されてきた。室町時代に成立した宇治七名園の一つの奥山園が、市街地南の台地上で今も茶栽培が行われている。４月～５月にかけて覆下茶園の景観が望める。

【活動のイメージがわかる写真】

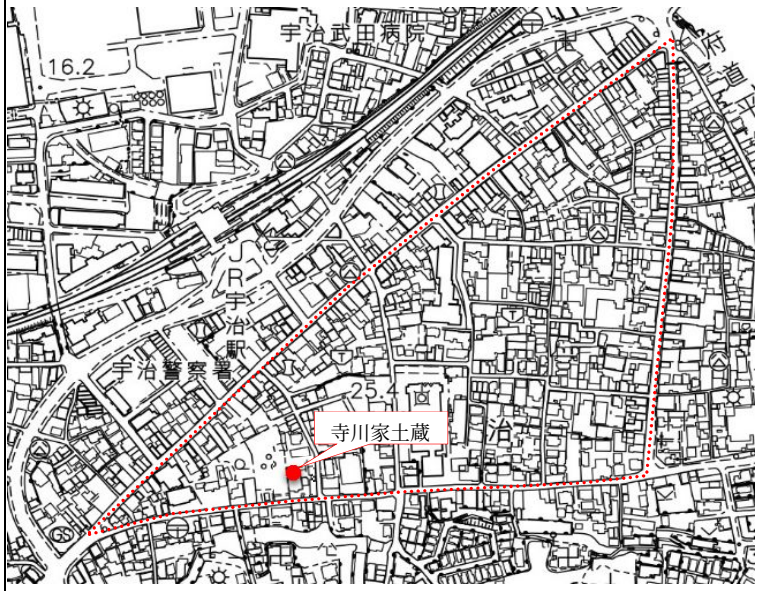
本簀の中での茶摘み



宇治・白川地区の茶畑分布図

２－１．茶どころ宇治の歴史的風致(覆下茶園の歴史的風致)

（１）宇治のお茶づくり

建　造　物	活　動　内　容	市街地環境（建造物と活動の関係性・一体性）
○寺川家土蔵（てらかわけ　どぞう） 寺川家土蔵と茶園 【建築年代】 寛延４年(1751)頃 【50年根拠資料】 祈禱札 文化的景観重要構成要素 【造り・特徴】 ２階建て土蔵造り、本瓦葺、切妻造り 元は茶工場であり、宇治市現存最古の茶工場	**○宇治のお茶づくり** 【50年根拠となる文献＋作成年代＋記述】 『宇治郷総絵図』(享保７年(1722)～延享２年(1745))に現行と同じ場所に土蔵が描かれており、お茶づくりが行われていたと想定できる。 【現在の活動内容】 中宇治地区で現存する唯一の茶園で、覆下栽培を行う。 茶摘みの時期になると寛延４年(1751)に建築された建物と覆下栽培を望むことができ、歴史的風致を感じることができる。 【活動のイメージがわかる写真】	

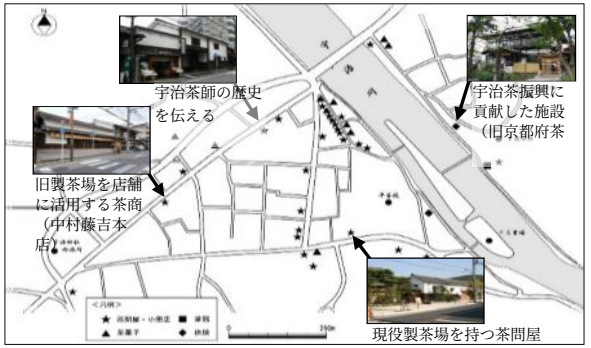
2－1．茶どころ宇治の歴史的風致

（1）宇治のお茶づくり

建　造　物	活　動　内　容	市街地環境（建造物と活動の関係性・一体性）
○史跡宇治川太閤堤跡（しせき　うじ　がわ たいこうつつみあと） 再現された石出し(北エリア) 【建築年代】 文禄3年（1594） 【50年根拠資料】 『家忠日記』(天正５年(1577)～文禄３年(1594)) 国指定史跡 【造り・特徴】 約400mに渡る堤跡で、様々な水制遺構が確認できる。代表的なものは100mごとに築かれる石出しである。 岸部分に砂が堆積し、茶畑が形成された。	**○宇治のお茶づくり** 【50年根拠となる文献＋作成年代＋記述】 明治21年(1888)の陸軍仮製地図でも、当該地に茶畑があることが確認できる。 【現在の活動内容】 宇治川沿いには、砂州の形成によって作られた茶園に良質な茶葉を栽培する茶園が連なる景観を今も見ることができる。 お茶と宇治のまち歴史公園内には、かつての茶園を再現しており、お茶摘み体験などができる。 【活動のイメージがわかる写真】 本簀と茶園と復元された覆小屋(南エリア)	 お茶と宇治のまち歴史公園パース図

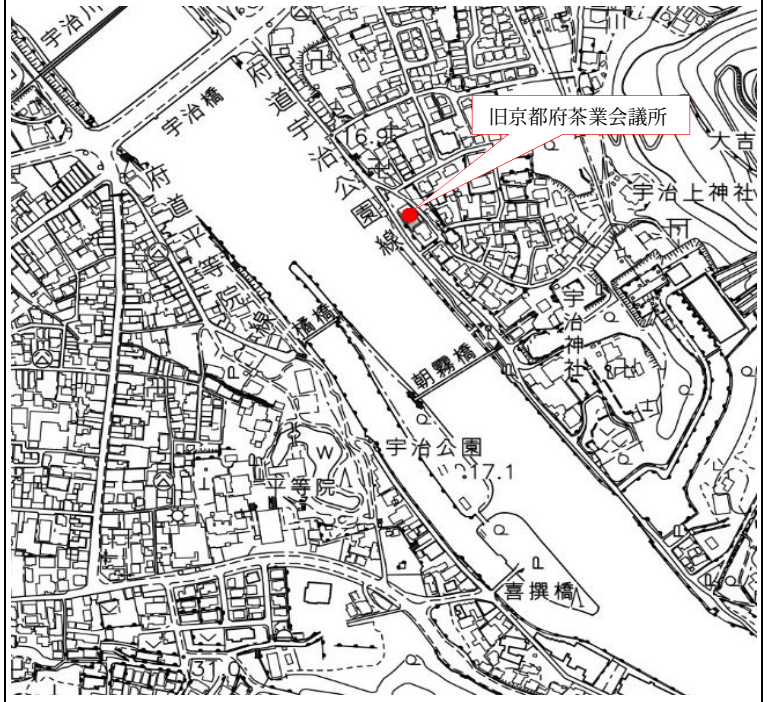
２－２．茶どころ宇治の歴史的風致

（２）お茶屋さんのある町並み

建　造　物	活　動　内　容	市街地環境（建造物と活動の関係性・一体性）
○お茶屋さんのある町並み 平等院表参道に立ち並ぶお茶屋さん 【建築年代】 近世 【50年根拠資料】 『兎道麁絵図』 【造り・特徴】 通りにお茶を取り扱うお店が軒を連ねる	**○活動の名前** 【50年根拠となる文献＋作成年代＋記述】 『京の華』(大正15年(1926))「宇治川に一名宇治紫と称する石あり、是を形どり大正元年頃より之を作り販ぎたるに始まり、現今宇治の土産品の一つとなれり。」と茶団子の紹介がある。また、喜撰糖が江戸時代から作られてきたという記載もある。 【現在の活動内容】 江戸時代、宇治橋通り沿いに多くの茶師が家宅を構えていた。明治以降も同様に宇治茶生産と販売を行う茶商が登場し、通り沿いに店を構えた。 また、江戸時代以来作られてきたお茶を使った名産品の開発が続けられ、お茶を楽しむ工夫が凝らされる。 【活動のイメージがわかる写真】	 茶関係店舗等の分布 平等院表参道や宇治橋通り、県通りには多くのお茶屋さんが店を広げ、茶どころ宇治らし

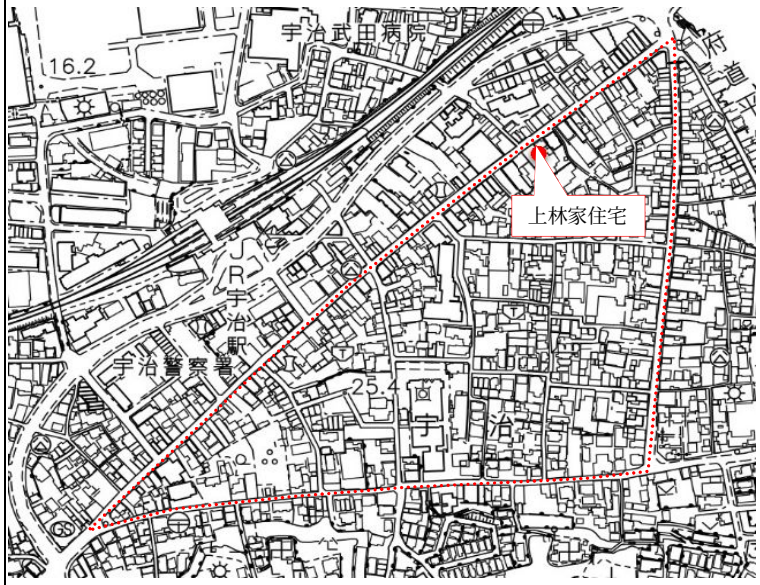
２－２．茶どころ宇治の歴史的風致

（２）お茶屋さんのある町並み

建　造　物	活　動　内　容	市街地環境（建造物と活動の関係性・一体性）
○旧京都府茶業会議所(現京都府茶業会館) 旧京都府茶業会議所 【建築年代】 昭和３年（1928） 【50年根拠資料】 『宇治市文化財総合把握調査報告書Ⅰ』 【造り・特徴】 木造二階建、桟瓦葺、入母屋造、正面中央に切妻造りの玄関	**○お茶をたしなむ文化** 【50年根拠となる文献＋作成年代＋記述】 宇治茶の品質向上のため、京都府下茶業組合取締所（現在の社団法人京都府茶業会議所）が明治17年（1884）に設立され、大正14年（1925）には京都府茶業研究所（現在の京都府農林技術センター茶業研究所）が設立され、宇治茶振興の組織づくりが行われた。 【現在の活動内容】 京都府茶業会館は、「匠の館」と称する宇治茶カフェを営業し、宇治茶振興に対する支援事業等を行っている。ここでは、お茶の美味しい淹れ方を日本茶インストラクターが丁寧に説明してくれる。 【活動のイメージがわかる写真】 市内で振る舞われる本格的な煎茶（匠の館）	

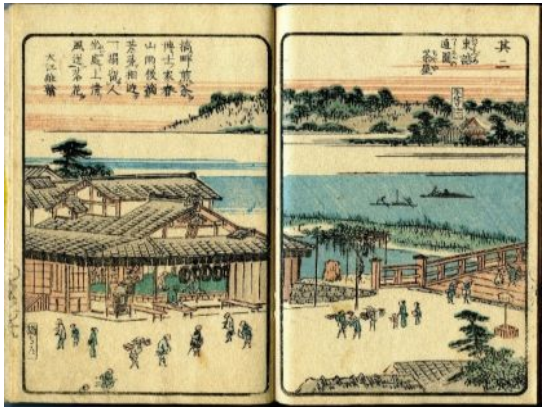
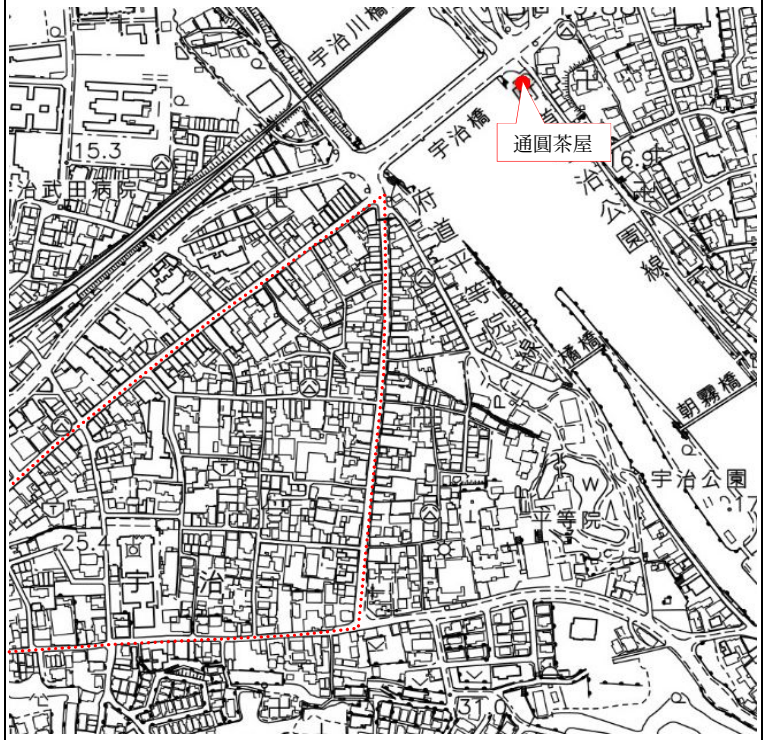
２－２．茶どころ宇治の歴史的風致

（２）お茶屋さんのある町並み

建　造　物	活　動　内　容	市街地環境（建造物と活動の関係性・一体性）
○上林家住宅（かんばやしけじゅうたく） 上林春松家長屋門（江戸中期） 【建築年代】 長屋門（江戸時代中期）、主屋（大正15年） 茶室松好庵（寛政11（1799）年） 【50年根拠資料】 茶室松好庵：野地板墨書 長屋門・主屋：『宇治市文化財総合把握調査報告書Ⅰ』 【造り・特徴】 茶室：2畳台目、本勝手台目切、切妻造、柿葺 長屋門：西側７間が２階建て、東側３間が１階建て 切妻造りの本瓦葺。茶師独特の建築物。 主屋：２階建て、１・２階ともに軒回りがせがい造り 平面形式は、前進建物に類似する	**○宇治のお茶づくり** 【50年根拠となる文献＋作成年代＋記述】 江戸時代の宇治は、将軍家御用の茶を毎年献上する義務を負っていた。『御実紀』(天保14年(1843))に御茶壺道中の記述あり。 【現在の活動内容】 上林春松家に伝えられる歴史資料を公開するために「宇治・上林記念館」を設立。宇治茶師の長屋門で歴史に触れることができる。また、記念館横には老舗茶店がある。 【活動のイメージがわかる写真】 	

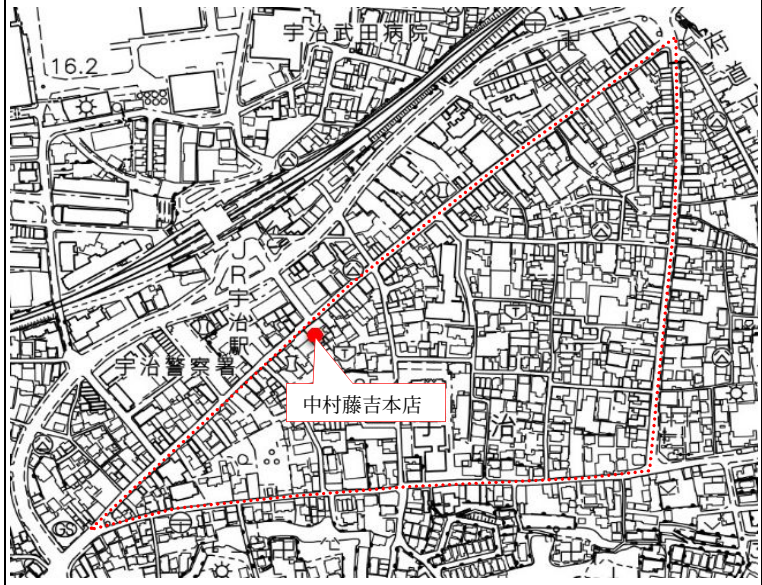
2－2．茶どころ宇治の歴史的風致

（2）お茶屋さんのある町並み

建　造　物	活　動　内　容	市街地環境（建造物と活動の関係性・一体性）
○通圓茶屋（つうえんちゃや） 通圓茶屋 【建築年代】 寛文12年(1672) 【50年根拠資料】 『宇治川両岸一覧』文久３年(1863) 『通円家住宅調査報告』 『通円家宅御造作』 【造り・特徴】 木造２階建て瓦葺、切妻造り 代々宇治橋の橋守を務めた。	**○お茶に親しむ文化** 【50年根拠となる文献＋作成年代＋記述】 『都名所図会』(安永９年(1780))に描かれている。通圓茶屋は、『雍州府誌』(貞享３年(1686)によると、始まりは平安末期と伝え、橋の袂に庵を結んで茶をふるまったのが最初と記載される。 【現在の活動内容】 宇治橋東詰にある通圓茶屋は1160年創業、義政・秀吉・家康らも一服したといわれる老舗。主人の家系は代々、宇治橋の橋守を務めた。店内の初代通圓座像は一休上人ゆかりの品。 通圓茶屋では、今も江戸期の『宇治川両岸一覧』に描かれた賑わいを見ることができる。 店主自らお茶を淹れるなどお茶に親しみやすい工夫がされている。 【活動のイメージがわかる写真】  『宇治川両岸一覧』通圓茶屋	

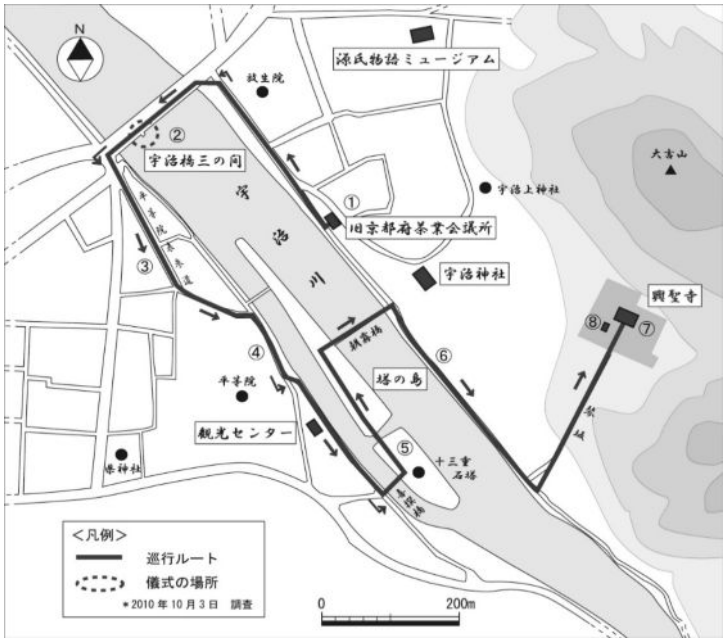
２－２．茶どころ宇治の歴史的風致

（２）お茶屋さんのある町並み

建　造　物	活　動　内　容	市街地環境（建造物と活動の関係性・一体性）
○中村藤吉本店（なかむら とうきち ほんてん） 宇治橋通りの中村藤吉本店 【建築年代】 主屋・焙炉場：明治時代中期 茶工場等：大正3年(1914) 【50年根拠資料】 中村藤吉氏所蔵古写真 『宇治市文化財総合把握調査報告書Ⅰ』 【造り・特徴】 茶の製造から製品の保管に至る工程を示す施設が残る家屋	**○お茶に親しむ文化** 【50年根拠となる文献＋作成年代＋記述】 明治時代に入ると、時代変革と新しい茶需要をとらえて、近代的な集約的かつ大規模な宇治茶生産と販売を行う茶商が登場し、通り沿いに店を構えていった。 【現在の活動内容】 旧製茶場を店舗に活用する茶商である。 現在、中村藤吉本店では製茶は行われておらず、茶や茶を使用した菓子類などの小売りや飲食業を営む。茶だけでなく、茶を使用した菓子類など製造販売することにより、茶に親しみやすくしている。 【活動のイメージがわかる写真】 中村藤吉本店の店内	 宇治橋通り沿いにある中村藤吉本店を望むと、明治時代中期に築造された主屋・焙炉場に屋号紋をあしらった暖簾がかけられており人々目を楽しませ、歴史的風致が感じられる。

２－２．茶どころ宇治の歴史的風致

（３）お茶に関する文化

建　造　物	活　動　内　容	市街地環境（建造物と活動の関係性・一体性）
○興聖寺（こうしょうじ） 茶筅塚 【建築年代】 茶筅塚：昭和39年(1964) 【50年根拠資料】 『京都新聞』 【造り・特徴】	**○宇治茶まつりと献茶祭** 【50年根拠となる文献＋作成年代＋記述】 宇治における「茶祭」：昭和7年10月1日「宇治塔の島で日本初めての茶祭」『日出新聞』・『京都府茶業百年史』 【現在の活動内容】 今日の宇治においても主要な年中行事として継承されている。儀式は、宇治橋三の間で行われる名水汲み上げの儀、興聖寺本堂にて行われる茶壺口切の儀、興聖寺山門前にて行われる茶筅塚供養があり、多くの人々が見学に訪れている。 【活動のイメージがわかる写真】 茶壺口切の儀	 宇治茶まつりルート図 宇治茶まつりは京都府茶業会館前を出発→宇治橋三の間で名水汲み上げの儀→平等院表参道→喜撰橋→興聖寺で茶祭り式典(茶壺口切りの儀式)→茶筅塚にて茶筅供養を行う。行列は神主、汲み上げの儀式で使用する桶の所有者、白装束を纏った人で構成される。古式ゆかしい装束を纏った行列が宇治川沿いを歩く姿は、歴史的風致を感じる。
○三の間（さんま） 宇治茶まつりでの宇治橋三の間から 【建築年代】 永禄８年(1565)に存在 【50年根拠資料】 絵図名 【造り・特徴】 宇治橋西詰から3本目の柱間に設けられた張出		

２－２．茶どころ宇治の歴史的風致

（３）お茶に関する文化

建　造　物	活　動　内　容	市街地環境（建造物と活動の関係性・一体性）
○萬福寺（まんぷくじ） 萬福寺 【建築年代】 寛文2年（1662）から順次伽藍が整備される。 【50年根拠資料】 『萬福寺文書』 萬福寺・萬福寺松陰堂の建造物(計23棟)が重要文化財 【造り・特徴】 伽藍配置：中国明朝様式 堂内：中国風	**○お茶をたしなむ文化** 【50年根拠となる文献＋作成年代＋記述】 宝暦4年（1754）俳人田上菊舎が萬福寺を訪れ「山門を　いずれば日本ぞ　茶摘うた」と詩っている。 【現在の活動内容】 隠元によって中国明の文人に愛された茶葉を急須で煎じて飲む喫茶方法（煎茶法）が伝えられ、萬福寺を中心に煎茶文化が全国に発信され普及していった。 萬福寺境内には全国煎茶道連盟の本部が置かれ、毎年全国煎茶道大会が開かれている。 日本遺産「日本茶800年の歴史散歩」を構成している。 【活動のイメージがわかる写真】 萬福寺での全国煎茶道大会	 駒蹄影園跡 萬福寺門前に建つ駒蹄影園碑の碑文に「明恵上人の歌　とが山の尾上の茶の木分け植ゑて　あとそ生べし駒の蹄影」と刻まれ、顕彰されている。（台石の上に下幅正面80cm　最大幅100cm　高166cm　宇治石）昭和32年（1957）に萬福寺門前に移転された。

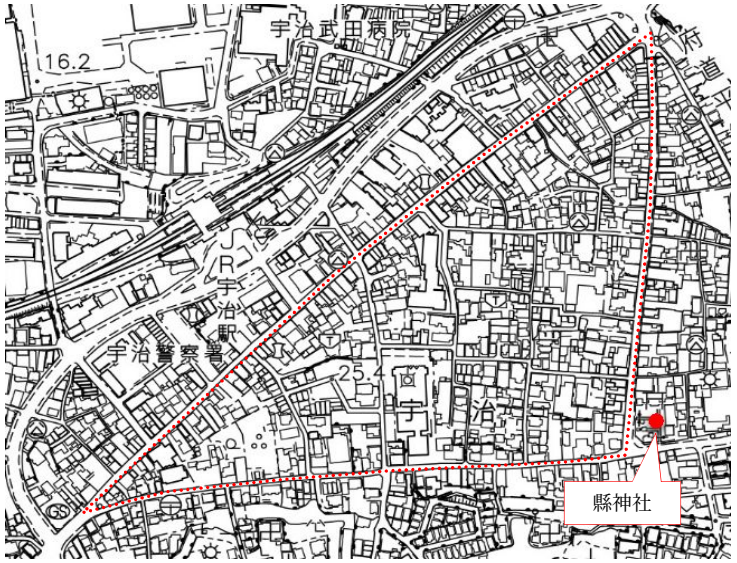
2．茶どころ宇治の歴史的風致

（3）お茶に関する文化

建　造　物	活　動　内　容	市街地環境（建造物と活動の関係性・一体性）
○松殿山荘（しょうでんさんそう） 松殿山荘 【建築年代】 大正8～9年 【50年根拠資料】 重要有形文化財指定(12棟) 【造り・特徴】 茶室を中心とする様々な建築群を整えた。円思想における象徴的図形である方形と円形を用いた独創的な意匠でまとめており，独自の茶の湯の空間を創出している。	**○活動の名前** 【50年根拠となる文献＋作成年代＋記述】 お茶を嗜む文化として、公益財団法人松殿山荘茶道会によるお茶会が開かれる。 【現在の活動内容】 【活動のイメージがわかる写真】	

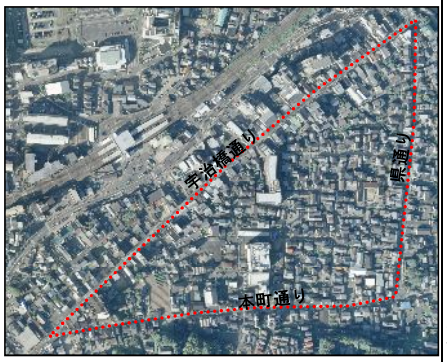
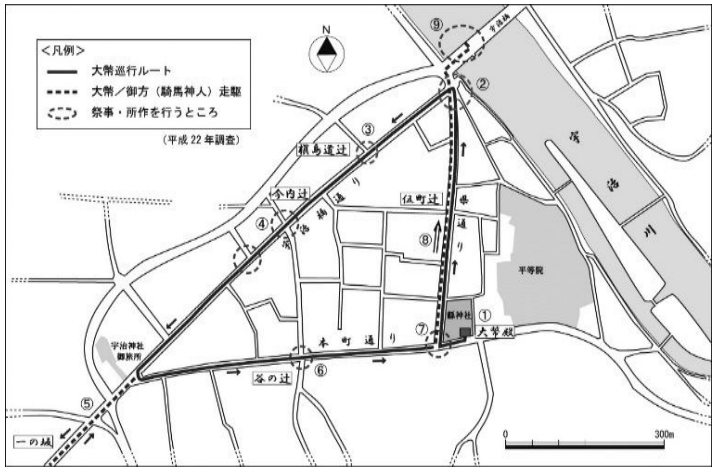
２－２．茶どころ宇治の歴史的風致（お茶屋さんの歴史的風致）

（３）お茶に関する文化

建　造　物	活　動　内　容	市街地環境（建造物と活動の関係性・一体性）
○縣神社（あがたじんじゃ） 縣神社拝殿 【建築年代】 本殿江戸末期 【50年根拠資料】 『京都の社寺建築　南山城編』 【造り・特徴】 本殿一間社流造　正面千鳥破風付、檜皮葺 向拝には獅子と竜の彫り物、蟇股の部分には竜があしらわれる	**○宇治の茶づくり** 【50年根拠となる文献＋作成年代＋記述】 『増補日本年中行事大全』(天保３年(1832))「祭礼火を禁じ闇中渡御」 【現在の活動内容】 あがた祭は、毎年6月5日から6日未明にかけて行われ江戸時代の宇治郷では製茶の最盛期に多くの労働者を周辺地域に依存していたため、繁忙な茶づくりから解放された労働者の労をねぎらう祭りである。梵天と呼ばれる神の憑代が深夜に縣神社を出発し、町を渡御巡行する。所々でブン回しと呼ばれる過激な回転儀礼を行う。 【活動のイメージがわかる写真】 深夜の梵天渡御	

3－1．宇治に伝わる祭礼の歴史的風致（大幣神事の歴史的風致）

（1）大幣神事

建　造　物	活　動　内　容	市街地環境（建造物と活動の関係性・一体性）
○三角形街区（さんかくけいがいく）  【建築年代】 南北朝時代 【50年根拠資料】 『宇治郷総絵図』(享保７年(1722)～延享２年(1745)) 【造り・特徴】 宇治橋通り・県通り・本町通りの3本の主要街路が二等辺三角形状に交差し、その中を碁盤目街路が区切る独特のかたちをしている。	**○大幣神事** 【50年根拠となる文献＋作成年代＋記述】 『菟道旧記』元禄10年（1697）に大幣神事の行列が描かれる。 【現在の活動内容】 現在は、旧久世郡宇治郷の有志が中心となった地縁的なまとまりの「大幣座」が大幣神事を運営している。大幣は縣神社を出発し、三角形街区を形成する宇治橋通り・本町通り・県通りを通り宇治橋で大幣を棄てる。宇治橋通りを通る際、辻々で地面に打つ所作を行い疫神を集める。 【活動のイメージがわかる写真】 	 大幣神事の巡行ルートと祭儀の場所 大幣神事は、梅雨時に中宇治に集まる疫神をまちの外へ追い出すものであり、神事の概略は神の憑代である「大幣」と呼ばれる大きな御幣を、古式ゆかしい行列とともに三角形街区を巡行させて疫神を集め、宇治川に流して祓うものである。 祭礼のルート上には、上林家住宅や中村藤吉本店があり、その前を古式の装束を纏い中世以来の祭具を持った行列が通る景色は風情と賑わいを伝える歴史的風致である。
○縣神社（あがたじんじゃ） 縣神社拝殿 【建築年代】 本殿：江戸時代末期 【50年根拠資料】 『京都の社寺建築　南山城編』 【造り・特徴】 本殿：一間社流造　正面千鳥破風付、檜皮葺 向拝には獅子と竜の彫り物、蟇股の部分には竜があしらわれる		

3－2．宇治に伝わる祭礼の歴史的風致（離宮祭の歴史的風致）

（2）宇治神社と宇治上神社の祭礼

建　造　物	活　動　内　容	市街地環境（建造物と活動の関係性・一体性）

○宇治神社（うじじんじゃ）

宇治神社本殿（重要文化財）

【建築年代】
鎌倉時代後期
【50年根拠資料】
本殿：重要有形文化財

【造り・特徴】
大型流造り・檜皮葺・三間社

○宇治上神社（うじかみじんじゃ）

【建築年代】
本殿：平安時代後期
拝殿：鎌倉時代前期
【50年根拠資料】
『宇治上神社文書』
本殿・拝殿：国宝
【造り・特徴】
本殿：流造・内殿三社を祀り内殿の壁や屋根の一部を共有する覆屋根を構えて一体とする
拝殿：寝殿造・檜皮葺の縋破風

○離宮祭

【50年根拠となる文献＋作成年代＋記述】

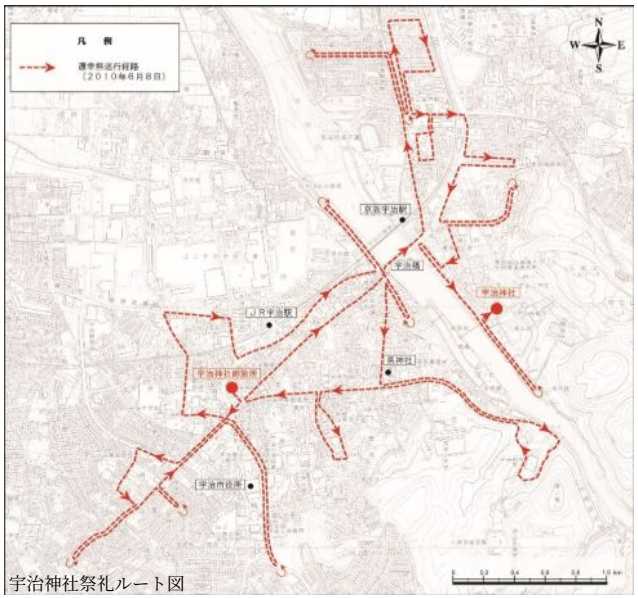
『菟道旧記』(江戸時代)に大きな御幣を捧げ持つ7人の侍者を先頭に巨大な天狗や鬼の面、槍鉾を捧げる多数の人たちが侍す３基の神輿を中心とする華やかな行列が描かれている。

【現在の活動内容】

離宮祭は、明治時代に離宮社が２社に分離してから神幸祭・還幸祭と名を変え、それぞれの神社で執り行われている。
宇治神社の神幸祭・還幸祭は、宇治神社を出発して御旅所→旧奈良街道→三角形街区→宇治橋→川東の各町内→宇治神社に至る。
宇治上神社の神幸祭・還幸祭は、宇治上神を社出発して宇治橋を渡り御旅所(槇島)→地区内→宇治橋→宇治橋→に至る。

【活動のイメージがわかる写真】

【宇治神社－還幸祭】御旅所（集会所）を出発

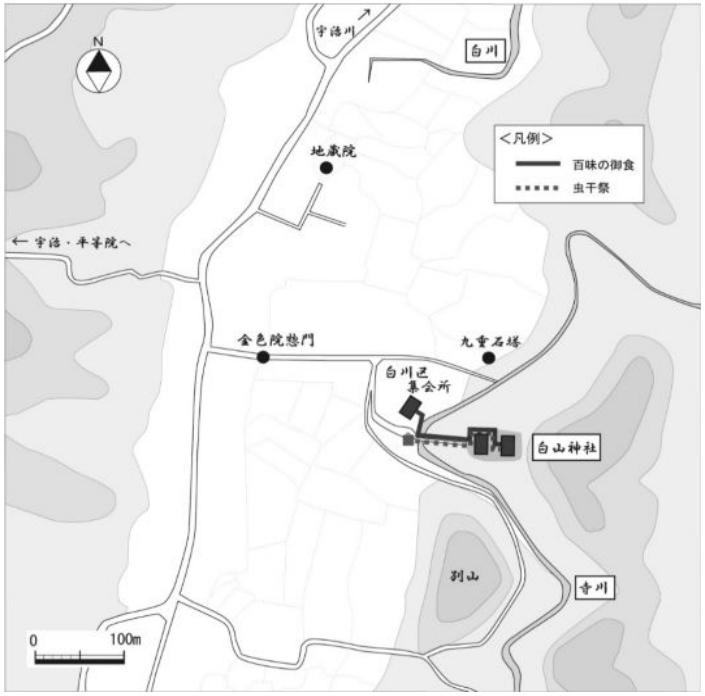


宇治神社祭礼ルート図

宇治上神社祭礼ルート図

3－3．宇治に伝わる祭礼の歴史的風致

（3）白川白山神社の祭礼

建　造　物	活　動　内　容	市街地環境（建造物と活動の関係性・一体性）
○白山神社（はくさん じんじゃ） 白山神社拝殿 金色院惣門 【建築年代】 本殿：明治時代 拝殿：建治３年（1277） 惣門：16世紀世紀 【50年根拠資料】 本殿：『松本嘉兵衛家文書』記載の棟札 拝殿・惣門：『白山宮之図』（江戸時代後期） 【造り・特徴】 拝殿：桁行３間、梁間３間・茅葺屋根・寄棟造り。内部は折上げ格天井 惣門：切妻造り、本瓦葺、四脚門	**○白川地区の祭礼** 【50年根拠となる文献＋作成年代＋記述】 『山城名跡志』(正徳元年(1711)刊行)に秋祭りが紹介される。 【現在の活動内容】 白川金色院で行われていた儀式が寺院廃絶後も白山神社の祭礼として残り、地元に継承されている。 白山神社の祭礼は、春祭り（3月18日）、虫干し祭り（7月18日）、秋祭り（10月18日）、御火焚祭り（12月18日）の4回行われ、トウヤ（頭屋）と呼ばれる、毎年交替制の３軒の当番の家によって準備が進められる。 【活動のイメージがわかる写真】 百味の御食を作る頭屋	 白山神社と祭礼の関係 静寂な谷里景観の中で行われる祭礼は、趣ある歴史的風致を感じることができる。